
前へならえ——新時代のオリエント

ある日の授業中、九〇年代生まれの大学院生たちに「前へならえ」という号令を知っているかと尋ねてみた。すると、全員が「知っている」「やつたことがある」と答えたので驚いた。というのも、受講生は日本人一名のほか、中国人二名、エジプト人一名だったからである。

きれいな縦列を作るために、両手を地面と水平にまつすぐ前に突き出すポーズが、民族も宗教も言語も異なる国 の学校教育において、まったく同じように実践されている。これが驚かずにはいられようか。

この日の授業ではE・サイード『オリエンタリズム』の序説を読んでいた。そこには次の一節があつた。

つまり言説^{デイスクール}としてのオリエンタリズムを検討しないかぎり、啓蒙主義時代以降のヨーロッパ文化が、政治的・社会学的・軍事的・イデオロギー的・科学的に、また想像力によって、オリエントを管理したり、むしろオリエントを生産することさえした場合の、その巨大な組織的規律＝訓練というものを理解することは不可能なのである。（平凡社ライブラリー版上巻、一二二頁）

M・フーコーは、権力の内面化をもたらすような監視（「見られてはいても、こちらには見えない」関係（＊1））や身体矯正のための身ぶりの反復を「規律＝訓練^{デイシプリン}」と呼んだ。サイードはこれをオリエンタリズムの分析に応用したのである。

「前へならえ」を挙げたのは、「規律＝訓練」を身近な例で示したかったからだ。しかし、はからずもこの号令は、オリエントに属する三つの国に共通するデイシプリンであることがわかつた。

日本の学校で現在も用いられている号令は、西洋式軍隊の育成のために蘭学者（兵学者）たちが紹介・翻訳したもので、幕末の農兵訓練に役立てられ、その後陸軍の歩兵教育に採り入れられた。「氣ヲ着ケ」「休メ」「右向ケ、右廻レ、右」などは、すでに明治初期の「歩兵操典」(*2)に記されていて、終戦時まで一貫して兵の基本動作として訓練されていた。また、これらはそのまま中学校体操科の兵式体操(*3)に応用された。

こうした号令は、「国民」を管理したり、むしろ「国民」を生産することさえした「巨大な組織的規律＝訓練」のディスクールの一つであつたといえよう。私たちは、幼い頃に繰り返し注意されながら校庭や体育館に並んで「気をつけ」や「前へならえ」を反復したおかげで、ずいぶん権力に対しても従順ですなおな、統治しやすい身体になつているように思われる。西川長夫は、「国民化が文明化であり、またそれが文明化である限り植民地主義を内包している」と指摘していたが、号令による「国民化」は、「植民地主義の倒錯した内面化」(*4)でもあつたのである。

ただし、「前へならえ」の号令だけは、「歩兵操典」や兵式体操の教科書に見あたらない。その意味では、現代の「前へならえ」は、軍事教練型のディシプリン（「氣ヲ着ケ」「休メ」）とはやや異なる役割を發揮しているのではないか。たとえば、エスカレーターの片側あけの慣習に象徴的に表れているように、「前へならえ」はほとんど強迫観念といつてもいいほどに内面化されているが、同時に誰でも瞬時に理解し実践できるほどに単純化され普遍化され、なおかつ道徳化された呼びかけである。その一方で最近気づいたのは、二列に並ぶべき場所で一列にしか並べないという現象である。見知らぬ他者の横に並べないことや、列の先頭に立てないことが、「前へならえ」——正確には「後ろへ従え」——を後押ししているのではないか。そこにあるのは内面化された権力への自発的服従というよりも、眼前の状況に対する無自覚な追従だけだ。

サイードは、「オリエンントを管理したり、むしろオリエントを生産する」といった効果をもたらす言説としての「オリエンタリズム」を検討すべきだと述べていた。だが、「植民地なき植民地主義」（西川長夫）の時代にあって、「オリエンント」という言葉を地政学的なカテゴリーとする必然性はもはやどこにもない。地球上のあらゆる場所が植民

地主義的状況を生み出す可能性を持つているのだとすれば、前へならう身体は、むしろこうした現代の〈新〉植民地主義的生産管理システムに適合された人間、すなわち新時代のオリエントを構成しているのである。

私たちは、世界中のあらゆる場所でバラバラに漂いながら、いつでも集合・整列・解散可能な身体として準備させられているのだろう。そこではもはや国家による管理を頂点とする複雑で階層化された〈規律＝訓練〉は必要ない。生産・流通・消費のシステムが個人に合わせてシステムの側を最適化してくれるからだ。「前へならえ」の單純明快さとその普及力は、民族も宗教も言語も超越した従順なる身体の誕生を告げているように私には思われた。

（村田裕和）

* 1 ミシェル・フーコー著、田村俊訳『監獄の誕生』（新潮社、一九七七年）二〇三頁。

* 2 『新式歩兵操典 生兵の部』（陸軍省、一八七八年）

* 3 生田清範編『団入兵式体操教範卷之一』（金港堂、一八八六年）、『師範学校新体制操教科書』（大正洋行出版部、一九三九年）など。

* 4 西川長夫『〈新〉植民地主義論』（平凡社、一〇〇六年）二七頁。